

担当者 : D.K.

●Chapter 3 Activity 3.1-3.2

■ 3.1 The ten principals of Assessment for Learning

Assessment Reform Group (1999) の中で The United Kingdom's Qualifications and Curriculum Development Agency (QCDA) は Assessment for Learning のポスターを掲載している。

○Assessment for Learning 実践のための 10 原則

(<http://language-testing.info/features/afl/4031aflprinciples.pdf>)

Assessment for Learning...

- ① is part of effective planning.
- ② focuses on how students learn.
- ③ is central to classroom practice.
- ④ is a key professional skill.
- ⑤ is sensitive and constructive.
- ⑥ fosters motivation.
- ⑦ promotes understanding of goals and criteria.
- ⑧ helps learners know how to improve.
- ⑨ develops the capacity for self-assessment.
- ⑩ recognises all educational achievement.

Q. このポスターに含まれる 10 原則についてそれぞれ討議せよ。

自らの指導の文脈ではどれが行われているか?

どのような具体的実践がこれらの原則を promote するだろうか?

(ex)

- Assessment for learning は大規模テストと異なり、到達度の確認や feedback が主な目的となる。
- Assessment for learning を学習者の学習段階の把握(②)と学習計画(①)及び動機付け(⑥)に使用することは多くの実践で行われており、その導入により学習者自身が学習の改善に assessment を利用する (⑧)とともに、目標や基準を明確にし(⑦)、自己評価の能力を高める(⑨) ことにつながっていると考えられる。一方、Assessment for learning を教室実践の中心に据えるまでは至っていない(③)、全ての教育的達成を認知できるまでには至っていない。
- ⑧に関して、Assessment for learning が生徒自身の学習改善への気づきを促す場合には綿密

な計画が指導が必要であり、教師の支援が必要である場合がある。教師は生徒が学習改善への気付きを行えるよう学習者が現在何を理解している・何が可能であることと何ができることが目標かの間 **gap** を意識し、その **gap** を埋める検討の機会を作れると良い。例えば、同じテストを時間をあけて2度行うことで、生徒がどのように学習改善を行い、成長したかを容易に見ることができる。

- ⑨に関して、生徒が自己評価の能力を高めるためには、(a)教師が評価の **tips** を指導すること、(b)生徒自身が自分のスコアに対してコメントをすること、(c)生徒が **portfolio** など記録をつけていき振り返りの機会をつくることなどが実践例として挙げられる。

■ 3.2 It's all about motivation

Motivation の研究は、伝統的な統合的動機付けと道具的動機付けの特性 (Gardner & Lambert, 1972) に関する理論から、近年の Dornyei らの学習者の将来的な L2 の概念と学習が結びついたときに動機付けは起こり、これは **self-perception** や **identity** と関係するという理論まで発展してきた。

Martin Lamb の語る motivation 理論についてメモをとりなさい。教室 learning/assessment 活動2つについて説明し、考え・理由を討議する。

(<http://languagetesting.info/features/motivation/mil.html>)

□Martin Lamb の motivation 理論

- ・ Motivation - identity – learning の関係性
(self = “the cognitive representation of one’s identity”)
(identity = a way of “relating the self to the world”)

- ・ インドネシアでの L2 教育の実践例から

⇒ English not clearly associated with any L2 cultural/people

インドネシアの人々にとって英語を学ぶことは「外国人(西洋人)」とつながる、という漠然としたもので、イギリス/アメリカ/オーストラリア etc. の特定の文化とのつながりは意識されていない (例: どんな英語が好ましいか? →特にこだわりはない or インドネシア英語が良い)。

⇒ Difficult to distinguish integrative and instrument motives

English native speaker に近づきたいなどの **high integrative orientation** と、仕事・試験などに動機づけられる **instrumental motivation** の間の区別は容易ではない。

(インドネシアの生徒へのインタビューから: 「英語を学びたいと思う」「英語は大学や仕事や様々な場面で必要」「海外で勉強・仕事をする際には流暢な英語で話したい」...)

- Future oriented components of the self:

“The selves we strive to become (IDENTITY) focus motivational attention (MOTIVATION), guide behavior (LEARNING), and are important source of positive self-regard.”(Oyserman, 2008)

- Dornnyei: L2 motivational self system (2009)

①Ideal L2 self (⇒この動機付けを促進する方法として、L2 で自己実現に成功している有名人などの Documentary video を視聴する等の方法がある。)

②Ought-to L2 self ←avoiding future problem

③L2 learning experience ←immediate L2 learning

- ポスト構造主義の identity

“identities are about negotiating new subject positions at the crossroads of the past present and future.”

□学習者の motivation を促進する教室における learning/ assessment の例

(1) native とのコミュニケーションの成功として、ALT と具体的場面でのやり取りに成功体験を得られるタスクやテスト

(2) 意味のやり取りを通して言語知識の獲得・言語運用を可能とする Task based language learning

(3) TOEIC スコアなど明確な目標と現在の自分と目標との gap を具体的に見ることができる assessment →教師も strategy 等の具体的指導が可能となる